

学校において予防すべき感染症について

下記の病気にかかったら、学校保健安全法第 19 条の規定により出席停止となります。
 (『欠席』ではありません。) かかった場合は学校へ連絡し、主治医の指示や登校基準に従って、家庭で安静にしてください。

第 1 種：治癒するまで出席停止とする。

エボラ出血熱、クリミア・コンゴ出血熱、痘そう、南米出血熱、ペスト、マールブルグ病、ラッサ熱、急性灰白髄炎、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群(SARS)、鳥インフルエンザ

第 2 種：登校基準に従い、出席停止とする。

病名	病原体	感染経路	潜伏期間	症状	予防法	登校基準
インフルエンザ	インフルエンザウイルス	患者の鼻腔、咽頭、気道粘膜の分泌液からの飛沫感染。	1～2日	悪寒、頭痛、発熱(38～40℃) 全身倦怠、筋肉痛、腰痛。	予防接種。手洗い、うがい。加湿。マスクの着用。	発症後5日かつ解熱した後2日を経過するまで。
百日咳	百日咳菌	飛沫感染 春～夏にかけて多い。	6～15日	初期からしつこい咳が特徴、発熱はあまりない。	定期予防接種。	特有の咳が消失するまで又は5日間の適正な抗菌性物質製剤による治療が終了するまで。
麻疹(はしか)	麻疹ウイルス	飛沫感染。 (感染力が最も強いのは咳が出始めた頃)	10～12日	発熱、咳、鼻水、めやに。 頬の内側に白いコプリック斑ができる。発熱後皮膚に発疹。	定期予防接種。患者の隔離。	解熱した後3日を経過するまで。
流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)	ムンプスウイルス	飛沫感染 冬～春にかけて多い。	14～24日	37～38℃の発熱。片側→両側のあごの後ろが腫れ、痛む。	患者の隔離。 唾液の付着に気をつける。	耳下腺、顎下腺又は舌下腺の腫脹が発現した後5日を経過し、かつ全身状態が良好になるまで。
風疹(三日はしか)	風疹ウイルス	飛沫感染	14～21日	発熱、発疹、咳、結膜の充血。	予防接種法に基づかない任意の予防接種。	発疹が消失するまで。
水痘(みずぼうそう)	水痘、帯状疱疹ウイルス	飛沫感染、まれに接触感染。	11～20日	水泡のある発疹が体中に次々とでる。	患者の隔離	すべての発疹が、かさぶたになるまで。
咽頭結膜熱	アデノウイルス	飛沫感染	5～6日	高熱、のどの痛み、結膜の充血。	手洗い、うがい。	主要症状が消失した後2日を経過するまで。
結核	結核菌	飛沫感染	年齢、体質、菌量により発病時期は様々。	初期は自覚症状なし。X線で見える事が多い。	十分な栄養と休養。X線による早期発見。	病状により学校医その他医師において感染のおそれがないと認めるまで。
髄膜炎菌性髄膜炎	髄膜炎菌	飛沫感染	3～4日	菌が血中に入り敗血症を起こし、高熱、皮膚・粘膜に出血斑、関節炎等が起こる。その後髄膜炎に発展する。	手洗い、うがい、咳エチケット。	

第 3 種：学校医その他の医師において伝染のおそれがないと認めるまで出席停止とする。

病名	症状	病名	症状
コレラ	水溶性の下痢。	腸チフス パラチフス	持続する発熱、発疹。
細菌性赤痢	発熱、腹痛、下痢。	流行性角結膜炎	急性結膜炎の症状で眼瞼が腫れる。眼脂、異物感もある。
腸管出血性大腸菌感染症	症状のないものから下痢、血便、腹痛など程度はさまざま。	急性出血性結膜炎	結膜炎や白目の出血。
その他の伝染病(医師が出席停止の措置が必要と認めた場合)			
溶連菌感染症	発熱、首のリンパ節の腫れ、喉の痛み。腹痛や嘔吐を伴うこともある。	ヘルパンギーナ	高熱、口内に水疱ができ、痛む。のどの痛み。
手足口病	手や足、口内に小さい水疱が出る。発熱することもある。	マイコプラズマ感染症	発熱、特に咳が特徴的。
伝染性紅斑(りんご病)	頬に境界のはっきりした紅い発疹。手・足、背中や胸にも広がる。	ウイルス性肝炎、流行性嘔吐下痢症、アタマジラミ、伝染性膿痂疹(とびひ)、伝染性軟属腫	